

この世が舞臺

●平成三年より「文武新論」のコラム欄「この世が舞臺」に掲載されたものの中から、次の十一篇を掲載します。

メルヴィル 『タイピー』 ①	2
メルヴィル 『タイピー』 ②	5
ホーソン 『地球の大燔祭』	8
バルザック 『知られざる傑作』	11
ゴーゴリ 『検察官』 14	
モリエール 『タルチュフ』	17
トルストイ 『光は闇に輝く』	20
コルネイユ 『ル・シッド』	23
メリメ 『マテオ・ファルコネ』	26
ラシーヌ 『フェードル』	30
マキヤヴェリ 『マンドラゴラ』	34

メルヴィル『タイピー』①

一八四二年、夏、アメリカの捕鯨船ドリー號がポリネシアのヌクヒヴァ島に停泊中、二人の若い船員が苛酷な待遇に立腹して脱走する。主人公のトム及び相棒のトビーである。追手を逃れ奥地に隠れようとする二人は、悪名高き食人種タイピー族の潜む谷間に迷ひ込んで仕舞ふ。しかるに、風評に反して、タイピー族は頗る穩和で親切であり、パンとココ椰子の果實が豊かに實る美しい谿谷の生活を享受してをり、正しくそこは「陽氣と戯れと上機嫌」しか知らぬ異教の樂園であつた。トムは云ふ、自分はタイピー族を知つて「人間性をより高く評價するやうになつた」。

一方、この時期、西洋列強は帝國主義的野望に驅られて太平洋に進出し、タヒチやマルケサス諸島を相次いで征壓、その脅威は今やタイピー族の秘境にも迫りつつあつた。樂園の危機を憂ひ、トムは文明人に烈しい怒りを叩きつける。

ありとある人殺し兵器の發明に我々が見せた悪魔のごとき巧みさ、我々が戦争を遂行する際の執念ぶかさ、戦争につきものの悲惨と荒廢は、それだけで文明化された白人を地上最大の猛獸として際立たせるに足るものである。

かうしてトムは文明人を扱き下ろし、未開人を持ち上げる。所が、やがて、なぜか「この上なく深刻な憂鬱の餌食」となり、「幸福の谷」を早く抜け出したいと冀ふやうになる。捕鯨船を脱走したをり彼は負傷したのだが、その傷は悪化したし、薬を求めて谷を離れたトビーが戻らず、トムは苦痛と孤獨に苛まれるし、またタイピー族がいかに親切であつても、食人種の不安も拭ひ切れない。それに、タイピー族はトムを谷から出すまいと躍起になるのだが、さういふ彼等の底意が解らない。けれども、さういふ理由だけでは、「自分でも理解に苦しむ」とトム自らが告白する「深刻な憂鬱」は説明出来ない。

その點に關する D・H・ロレンスの説は興味深い。彼は云ふ。「幸福の谷」は、實はトムを少しも幸福にはしなかつた。南洋の未開人と西洋の文明人とは、「生のリズム」が餘りに相違してゐたからだ。古代文明の昔から、西洋人は「生の苦闘、意識の苦闘、魂の苦闘」を重ねながら前進し續けて來たし、今後も前進し續けるであらう。それが西洋人の宿命なのだ。そしてさういふ西洋人の生き方と、過去に停滞し意識が眠つた儘の未開のそれとの間には、どうしても乗り越えられぬ深淵がある。要するに、「我々は後退出来ない、といふのが本當なのだ。裏切者なら出来る。だが、メルヴィルには出来なかつた。(中略)私にも出来ない」、さうロレンスは云ふ。

結局、トムは追ひ纏る親しい蠻族と格闘し、海に沈め、樂園脱出を強行する。詰り、ロレンスの云ふやうに、トム即ちメルヴィルは、西洋人たる己が宿命にこそ忠實たらんとしたのである。『タイピー』の五年後、メルヴィルは『モービー・ディック』を書く事になるが、それは激烈な「魂の苦闘」の物語なのである。

所で、一八四二年と云へば船來航の十一年前である。タヒチやマルケサス諸島の運命は免れたが、吾國もやはり西洋列強の壓力に屈して鎖國の國是を改め、爾來、西洋の文物を夥しく導入する事となつた。しかるに、明治二十八年、内村鑑三はかう書いた。「ダンテよ、なんぢの詩歌は三味線に合はす能はざるなり」、「もし今日の日本にあらば、彼は無用の長物のみ」。

平成三年の日本に於ても、ダンテはもとより、メルヴィルもロレンスも「無用の長物」でしかない。ロレンスの云ふ西洋人の宿命は、つひに我々のものではないからであつて、寧ろタイピー族の生き方の方が、よほど我々に近いとさへ私は思ふ。(續く)

(土岐恒二譯・集英社世界文學全集)

メルヴェイル『タイピー』②

『タイピー』に描かれてゐるポリネシアの蠻族タイピー族の生き方の方が、西洋人のそれよりも我々に近しいとさへ思ふと、前回、私は書いた。タイピー族と違つて我々は人肉を食ふほど野蠻ではないし、木の棒を擦り合はせ火をおこすほど原始的でもないが、柳田國男の云つたやうに、日本人にとつての幸福とは「米が澤山取れる事」であり、タイピー族にとつてのそれも、パンとココ椰子の果實が澤山取れる事なのである。また、ジョージ・サンソムの云つたやうに、昔も今も我々は宗教上の「罪悪感の苦惱に苦しまず、『善悪』の問題を解くための恐しい悩みを持たない」（福井利吉郎譯）が、タイピー族もまた「宗教上の抽象的な問題に頭を悩ませたり」はせず、自然のリズムに従つて暢氣に一生を送るのである。

但し、タイピー族は頗る怠惰であつて、満腹になれば晝夜を問はず眠つてゐる。詰り、彼等にとつての人生とは、「しばしば中斷される安逸な眠り以外の何物でもない」のだが、タイピー族とは異り、日本人は頗る勤勉である。働く事が大好きで、經濟大國となつた今もなほ、睡眠時間を削つて働き詰めに働いてゐる。だが、單に勤勉だけならば、蟻や蜂

だつて同じであつて、「働き蜂」たる今の日本人も、何の為に働くのか、などといふ「抽象的な問題に頭を悩ませ」る暇もなく、ただ闇雲に働いてゐる。さういふ「思考停止」の勤勉と、タイピー族の「安逸な眠り」との間に、一體どれほどの懸隔があるか。

その點、「タブー（禁制）」をめぐるタイピー族と主人公トムとの確執は興味深い。ある日、トムはタイピー族の少女ファヤウエイとカヌーで船遊びをしたいと思ひ、コリ・コリといふ若者にその旨を告げる。すると、「考へもつかないもつての他の事として」、コリ・コリは猛然と反對する。タイピー族の間では、カヌーに乗れるのは男だけで、女は近附く事さへ許されてゐなかつたのだ。そんな「タブー」は理不盡だとトムが思ひ、「なぜ女がカヌーに乗る権利を持たないのか」と、タイピー族の酋長に質問する。酋長は困惑して、説得これ努めるのだが、トムはどうしても納得せず、結局、ファヤウエイにだけは例外的に「タブー」の適用が免除される事となる。

この逸話には「象徴的な意味合」があると、アメリカのある學者は云つてゐる。タイピー族にとつての「タブー」とはひたすら黙従すべき對象であつて、批判など思ひもよらぬ。しかるに、トムにとつては、不合理と思へるならばそれは打破すべき對象でしかなく、さういふトムの考へ方はいかにも近代の西洋人らしいといふのである。事實、西洋近代の

本質は、何よりもまづ批判精神にあり、それは、クリスト教の神といふ、西洋人にとつての最大の「タブー」さへ容赦しなかつた。作者メルヴィルにしても、聖書の文章に朱を入れるやうな事をやつてゐたさうであり、それを知つて、敬虔な妻は胸を痛めてゐたといふ。さういふ批判精神を、西洋と付合つて百年以上になるのに、我々は殆ど學んでゐない。

野黨第一黨の黨首が「駄目なものは駄目」と云ひ、「なぜ」駄目なのかについて少しも考へようとせぬ愚昧は論外としても、與黨にした所で、長年、防衛費の「GNP一パセント枠」とやらを怪しまず、中曾根内閣がその打破を試みる迄は後生大事に守り續けてゐたのだし、それに何より、我々が天皇を戴いてゐるゆゑんについて、國民の大半が何も考へてゐない。石原愼太郎氏によれば、今、「ヨーロッパの近代主義」は「下降線を辿つてゐる」(『文藝春秋』八月號) さうだが、人様の事などを論ふ前に、今の日本人がさつぱり頭を使はず、その點、ポリネシアの蠻族なみの「安逸な眠り」を貪つてゐる現状についてこそ、眞劍に思ひを致すべきである。

(土岐恒二譯、集英社世界文學全集第十四卷)

ホーソン 『地球の大燔祭』

昔、ある時、「世界の中心に位置する」とされる大平原に、大勢の社會改革者が集つて、巨大な焚火をした。「世界中の使ひ古しのがらくた」をそこで燃やして、舊來の傳統や習慣を世界から一掃してしまはうとしたのである。まづ、王侯貴族の「由緒あるがらくた」たる勲章、系圖、王冠、寶珠などが火中に投じられる。平民は大喝采する。「同じ土くれから生れ、同じ精神の缺點を持ちながら」、特權を享受して來た連中への、正にそれは「勝利の瞬間」なのである。

續いて、ありとある酒類が集められ、珈琲、紅茶、煙草といった「人生の藥味」もろとも容赦なく焼却される。この先、「どうやつてこの世の憂さを晴らしやいんだ」と嘆く聲も聞かれるが、もとより、改革家達はそんな聲に耳を藉さうとはしない。

次は武器の番である。スペイン無敵艦隊の火炮とか、ナポレオンとウェリントンが對峙した折の大砲とかいふ謂れある兵器に始つて、錆ついた刀劍や小銃の類に至るまで、「恐ろしい人殺しの道具」が總べてこの世から消えた。太鼓が打ち鳴らされ、喇叭が吹き鳴らされ、その「喜ばしい知らせ」が報じられると、「戦争の恐ろしさ、愚かさに脅えてゐた」

手合は、「限りない歡喜」に胸を躍らせたのである。

所が、その時、一人の老いたる軍人が「冷笑を浮かべ」てかう呟く。こんな戯けた事を幾らやつても、所詮、武器製造業者に新たな仕事を拵へてやるだけの事ではないか。語りの「私」が驚いて云ふ。またぞろ武器を作らうとするほど人類が愚かだと、あなたは云ふのか。すると、傍らにゐた冷酷な顔附の男が口を挟む。武器なんぞ改めて作る「必要もないさ。カインがアベルを殺さうとした時、武器がなくても一向に困りはしなかつたぜ」。老いたる軍人も云ふ。戦争の「深刻な必要性」といふ事が、「そこらのお目出度い紳士ども」には解つてゐない。だが、國家間の「いざこざ」ををさめてくれる大法廷がどこにあるか。戰場こそは「唯一の法廷」ではないか。

けれども、改革家達の「過去破壊」の熱情はとどまる處を知らず、つひには證書や法律文書の類はもとより、聖書も含め「文字で書かれたもの」一切を灰にして仕舞ふ。だが、さうして焼き盡くされ「清められた」世界に、目が「赤い光」を放つ「陰氣な顔色」の男が登場してかう語るのである。「知つたかぶり」の連中が「火にくべるのを忘れてゐたものが、まだ一つある」。「人の心」だ。他の何が焼き滅ぼされても、それさへ生き残つてゐる限り、以前と同様の「惡と悲惨」が、そこからまた生れるであらう、と。

今、吾國には、「お目出度い紳士ども」がわんさとゐる。例へば、核兵器を「現代の悪魔」と考へる平和主義者がさうである。だが、ホーソンが書いてゐるやうに、アベルに殺意を懷いたカインにとつて、棒切れ一本が武器として充分だつたであらう。詰り、「悪魔」は「人の心」の中にこそゐるのであつて、その「人の心」が「清められ」ぬ限り、核兵器の有る無しに拘はらず、地上から殺し合ひはなくならぬ。現に、「悪の帝國」といはれたソ聯が氣息奄々たる今も、ナシヨナリズムゆゑの紛争は激化の様相を呈してゐる。ナシヨナリズムも、古來、「人の心」から消滅した例のない感情であつて、それに起因する國家間の「いざこざ」は、いつの世にも、最終的には戰場といふ「唯一の法廷」で決著をつけるしかなかつた。しかるに、吾國には、保守・革新の別を問はず、「國聯中心主義」とやらを盲信する手合が後を絶たない。「お目出度い紳士ども」と云ふしかない。

(竹村和子譯、『バベルの圖書館(三)』、國書刊行會)

ホーソン『地球の大燔祭』

バルザック『知られざる傑作』

千六百十二年、暮、「畫道の初心者」たる貧しき青年プーサンは、パリに住む高名な畫家ポルピユスの知遇を求めてその家を訪ね、そこで、「何かしら惡魔的な」雰圍氣を漂はせてゐる異様な老人に出會ふが、その折、老人がポルピユスの繪を酷評して、ポルピユスがそれを「拜聽」する様子に驚く。老人は言ふ。「君達の描く人物と來たら、色を塗つた影の薄い幽靈」に過ぎないのに、何と君達は「それを繪と呼び藝術と稱するのだ」。當初、プーサンは老人に反發するが、ポルピユスの繪に手を入れる老人の絶妙な筆捌きにすつかり感心してかう思ふ。この老人の身體には「鬼神が宿つて」ゐて、それが「老人の手を否應なしに引つ掴み、その手を通じて勝手な振舞をしてゐるのだ」。

その日、老人はポルピユスとプーサンを自宅に招く。ポルピユスが老人に言ふ。フレンホーフェル先生、あなたの「美しき諍ひの女」の繪が拜見出來たら、自分にももう少し増しな繪が描ける筈です。すると、老人は興奮して言ふ。あれを見せるなんて、とんでもない。あれに取組んで十年にもなるが、「わしはまだまだ満足し」てゐない、「自然を敵にまはして戦ふのだ、そんな十年ぐらゐの歲月がなんになる」。そして、暫く深い瞑想に耽つ

た後、老人は言ふ。「今日までわしは、一點非の打ちどころのない様な女に會ふ事ができなかつた」。「おお、一瞬間、唯の一目、崇高な完全な自然を、詰り理想を見るためとあれば、わしは全財産を投げ出しましょう」。

「老人のうちにある全てが、人間性の限界を超えて」ゐる、彼は正に「祕密と激情と夢想を伴ふ藝術それ自身」なのだ、さう思つたプーサンは、「女に備はる財寶の全てを身につけてゐる」戀人のジレットを、老人のモデル臺に立つやう説得しようと思つた。そして、委細は省くが、嫌がる彼女を何とか説伏せる事に成功する。

そんな或日、ポルビュスが老人を訪ねると、老人はひどく落込んでゐて、自作の出來映えにどうしても満足出來ないから、モデルを求めて旅に出ると語る。そこでポルビュスは老人に、「美しき諍ひの女」さへ自分とプーサンに見せてくれれば、ジレットがあなたのモデルになる事をプーサンは承諾するだらうと言ふ。そこにプーサンとジレットがやつて來る。ジレットの美に打たれた老人は、二人の畫家に自作を見せる事にする。

所が、老人が見せてくれた繪を二人が幾ら目を凝して見てみても、唯の「混沌とした色」の塊にしか見えない。無限の理想を求めて、老人は色を塗り重ねた擧句の果に、繪を臺無しにして仕舞つたのだが、自らはそれと氣附かずにゐたのである。それ故「このカン

ヴァスにはなんにもない」と、とプーサンが叫ぶと、老人は憤然とし、やがて眞つ青になつて泣出し、二人を追出し、その晩、繪を焼き拂つて死んで仕舞ふ。

「情熱こそは人間性の全部である。情熱なくして宗教も、歴史も、小説も、美術も無用の具であらう」と作者バルザックは言つた。勿論、人間は有限の存在でしかないから、フレンホーフエルの様に無限の理想なんぞを求めようとすれば「破滅」せざるを得ない。それに、「人間性の限界を超え」て、「自然」相手に「戦はう」とする情熱は、所詮、吾々日本人のものではない。けれども、一方、己が現状に甘んじ、「まだまだ満足」出来ぬなどと思ふ事のない情熱無き手合は、洋の東西を問はず、何をやらうと、「影の薄い幽霊」の類しか生み出せはしない。「最高の情熱」たる宗教的信仰に達し得ぬ者にも、人生は「充分の課題」を與へるのであり、それを「誠實に愛する」者の人生は、斷じて「無駄」とは言へぬ、とキルケゴールは言つてゐる。フレンホーフエルの人生も「無駄」ではなかつた。だが、國民がエコノミック・アニマルたる事に自足してゐるこの國には、その種の「誠實」なんぞもはや藥にする程もありはしない。

(水野亨譯、岩波文庫)

ゴーゴリ『検察官』

帝政ロシアのとある小都市の市長が、慈善病院監督、學務監督、判事、警察署長といったお偉方を市長邸に呼びつけ、首都ペテルブルクから検察官がお忍びでやつて来るらしいと告げると、一同の顔色が變つた。検察官に知られては都合の悪い事柄がこの市には山程あつた。慈善病院の運営の仕方は頗る杜撰だつたし、市役所の役人は好き勝手な事をやつてゐたし、判事は平氣で袖の下を取つてゐたし、權勢を笠に著た市長の横暴な振舞は市民達の強い恨みを買つてゐた。

この難局をどうやつて切り抜けるかと、全員が額を集めて相談してゐると、二人の地主が駆け込んで来て、検察官らしい男を市内の宿屋で發見したと告げる。ペテルブルクからやつて来た、フレスタコーフといふ名の若い役人で、二週間前から逗留してゐるのだといふ。市長はてつきりその男こそ検察官だと思ひ込み、狼狽して叫ぶ、この二週間の間に、俺は不法に兵隊の女房に鞭を食らはせたし、囚人には食物を支給しなかつた。ああ、どうしたらいいか。が、事ここに至つては、検察官の機嫌を取結ぶべくやれる限りの事をやるしかない、さう市長は考へ、早速、宿屋に駆けつける。

所が、實はフレスタコーフは、ただの旅行中の下級官吏でしかなく、トランプに負けて文無しとなり、宿賃が拂へずやむなく逗留してゐたのであつた。それゆゑ、市長の突然の出現に、逮捕しに來たかと内心びくつくのだが、彼を檢察官と信じ込んでゐる市長は、宿賃を肩代りした上に、市長邸に滞在してほしいと申出る。

市長邸でフレスタコーフは下にも置かぬ持て成しを受ける。すると、元來、頭の「からつぽ」な人間だから、調子に乗つて市のお偉方を前に嘘八百を並べ立て、自分はプーシキンの無二の親友で、ペテルブルク一番の豪邸に住み、宮中に屢々伺候し、請はれて大臣になつた事もあり、樞密院なんぞは叱り飛ばした事さへあるなどと喋りまくる。一座の者は皆、富や名聲や權威にからきし弱い連中だから、すっかり度肝を抜かれて仕舞ふ。

やがて、お偉方は賄賂をつかませる爲に、下層市民は市政への不満を訴へる爲に、フレスタコーフの許を次々に訪れる。一方、フレスタコーフは市長の妻と娘をたぶらかし、娘と結婚の約束をする。娘が玉の輿に乗る事になると市長夫妻は大喜びする。所が、ある日、フレスタコーフは金持の伯父を訪ねると、突然、出立して仕舞ふ。一方、市長はお偉方を前に己が幸運を誇らしげに語つてゐる。そこへ郵便局長が飛込んで來る。フレスタコーフが友人に書いた手紙を開封してみたなら、そこには、檢察官と思ひ込んだ連中の愚昧

を嘲笑ふ文句が書き連ねてあつたといふのである。

満座は騒然となり、あんな若造に騙された責任はお前達にあるとて、二人の地主を市長達が散々罵つてゐると、憲兵が入つて来て、ペテルブルクから檢察官が到着したと告げる。一同、愕然とし、凝然と立ちつくす。

この芝居の初演を観て、「みんな散々にやつつけられたが、誰よりも一番ひどくやられたのはこのわしだ」と、ロシア皇帝ニコライ一世は叫んだといふ。ゴーゴリの描いた淺ましい人間の愚かさは、吾々全ての持ち合はせてゐるそれである。フレスタコーフにしてやられたと知つて、「どうしてこんな風になつたか、(中略)何か靄の様なものが、みんなの頭をぼうつとさせてしまつたのだ」と慈善病院監督は言ふが、バブル經濟とやらに燥ぎ回つて、日本人の多くが錢儲けに「頭をぼうつとさせて」ゐたのはつい先頃の事である。しかも、バブルが弾けた今、株の暴落で大損をさせられたのは證券會社の責任、訴へてやると息巻く手合もゐるといふ。「自分のつらが曲がつてゐるに、鏡を責めて何になる」と、この芝居の題辭にあるけれども、己れの「つらが曲がつてゐる」事を忘れると、人間はどこ迄も圖々しくなる。

モリエール『タルチュフ』

パリの裕福な商人オルゴンは、教會でタルチュフといふ貧しい男と知合ひ、その愼しく信心深げな態度に感動し、屋敷に連れて來て兄弟同然に扱ひ、やる事なす事褒め稱へ、家族そつちのけでタルチュフと許り附合つてゐる。するとタルチュフは次第に主人面をする様になり、しかも何かにつけて信心をひけらかし、家族や召使の猛反撥を買ふのだが、家族が何を言つてもオルゴンは耳を藉さうとしない。

やがてオルゴンはタルチュフを婿にしたいと思ひ、娘のマリアーナに愛し合つてゐる許婚との婚約の破棄を迫る。オルゴンの美しい後添エルミールはマリアーナに同情し、娘の戀路の邪魔をしないでくれとタルチュフに頼むと、自分の戀してゐるのはあなただとして、タルチュフが激しく言寄る。するとそこへ、盗み聽きをしてゐたオルゴンの息子ダミスが現れ、タルチュフの偽善の證據を掴んだ、お父さんの迷ひを覺してやると叫ぶ。

だが、息子の言葉をオルゴンは信じようとせず、聖者の様な方を侮辱するとは何事かと叱り附け、勘當を言渡し、そんな告口をされた以上家を出るしかないと言つてタルチュフを引留め、全財産を譲渡して跡取りにすると約束し、契約書を作製し、タルチュフと直ちに

結婚する様娘に命じる。　　マリアーヌを救ひたいと思つたエルミールは、一計を案じ、夫を説得して机の下に隠し、タルチュフを呼付け、求愛に應じる様な素振りを見せる。喜んだタルチュフは、こつそり罪を犯すのは罪を犯す事にならないとて、オルゴンのお人好しを嘲笑する。激怒したオルゴンが飛出して、出て行けと叫ぶと、タルチュフは捨て臺詞を残して姿を消す。

暫くしてオルゴン家に執達吏が現れ、契約書により財産はタルチュフのものだから、即刻家を明渡せと言つて歸つて行く。續いてマリアーヌの許婚がやつて来て、タルチュフが國王に訴へ出た、警吏が来るからすぐに逃げろと言ふ。以前、國事犯の友人から預つた祕密書類を、處置に困つたオルゴンがタルチュフに託した事があつて、それが悪用されたのである。そこにタルチュフが警吏と共に現れ、この恩知らずと罵るオルゴンに、「國王の御爲」を圖るのが自分の義務だと語り、早く逮捕をと警吏をせきたてると、警吏が言ふ。タルチュフは名うての詐欺師であつて既に手配中であり、その事を國王陛下は先刻御承知であり、その上で、今回の訴へについて曇りなき判断を下された、牢獄に行くのはタルチュフ、お前だ。

かくしてオルゴン家には平安が戻る譯だが、「國王の御爲」とタルチュフが言つた時、

忠實な召使ドリーヌが叫ぶ。憎たらしい男だ、「人の崇めるものを盾にとつて、拔目なくその後ろに身を隠す手を知つてゐるんだから」。灣岸戦争の折、日本は狡いといふ批判が諸外國にあつた。多國籍軍の恩恵は誰よりも多く受けるくせに、平和主義といふ「盾」の「後ろに身を隠」さうとする日本は狡猾なタルチュフの國だと、諸外國は考へたに相違ない。但し、日本が崇めてゐる平和を諸外國までが崇めてゐる譯ではない。

所で、オルゴンは確かにお人好しだが、信仰といふ本氣で「崇めるもの」を持合せてゐた。それ故タルチュフの正體を知つて、彼は絶望して叫ぶ、信仰だの聖者だのはもう眞つ平だ、俺は悪魔より悪い人間になつてやる。するとオルゴンの義兄クレアントが言ふ。どうしてさう極端から極端に走るのか、眞の信仰への尊敬を失ふくらゐなら、如何様の信心に騙されてゐる方が未だしも罪は軽い。クレアントの言ふ通りであつて、クリスト教信仰に限らず、假令騙される事があらうとも、人には何か本氣で「崇めるもの」がなくてはならぬ。今の日本の最大の問題は政治腐敗でも經濟不況でもない。金錢や生命以外に「崇めるもの」を何一つ持合せずに生きてゐる事をまるで疑つてゐないといふ點にこそある。詰り、今、この國にオルゴンはゐない。タルチュフが今の日本に現れたら、己れの流儀が通用しないのにさぞ困却する事であらう。

(鈴木力衛譯、岩波文庫)

トルストイ『光は闇に輝く』

ロシアの田舎に住む裕福な地主サルインツォーフは、愛する妹の死をいたく哀しんで、福音書に没頭する毎日を送つた擧句、人はイエスの愛他主義に従つて生きねばならぬと確信して、或日妻にかう告げる。俺は領地を農民に分け與へ、屋敷は學校に寄附し、お前達と共に庭番の小屋に住む積りだ。仰天した妻は、乳飲み子を含めて七人もゐる子供達の將來をどうする積りかと涙ながらに訴へるが、己が信念を枉げたくない、せめて領地だけはどうしても手放すと言ひ張る夫を説得し、領地の所有權を自分の名義に書換へさせる。けれども、やがて、モスクワの屋敷に移つたサルインツォーフは、妻の説得に屈した己れを腑甲斐無く思ひ、挫折感に苦しめられるのである。

一方、サルインツォーフの娘リユーバの許婚で、公爵家の一人息子ボリースは、サルインツォーフの考へに熱烈に共鳴し、イエスの教へを奉じる以上兵役に服する譯にはゆかぬとて、宣誓を拒否して憲兵隊に拘束され、訊問を受けるが、「惡に加擔する事は出来ない」とて信念を枉げようとせず、つひには正氣を疑はれて精神病院に送られる。リユーバは屢々面會に行つて泣きながら翻意を迫るが、ボリースは動じない。

それから一年後の或晩、サルインツォーフの屋敷で舞踏會が開かれる。既にリユーバはボリースを諦め、若い裕福な貴族と結婚する意思を固めてゐる。音樂が奏でられ、みな楽しく踊り出すが、サルインツォーフだけは姿を見せない。家出の決心をして、その支度をしてゐたのである。妻が思ひ止まらせようとすると、サルインツォーフが言ふ。もうこんな墮落した生活は續けられない、福音書の清貧の教へを口では唱へながら、自らは財産を妻に譲つたといふ口實の下に、贅澤な屋敷で安樂な生活を送つてゐる、さういふ偽善はどうしても許せない、止めないでくれ。すると妻は、あなたが行くなら私もついて行く、もう子供達がどうならうと構ひはしないとて泣き叫ぶ。サルインツォーフは結局家出を斷念する。が、やがて一人きりになると叫ぶ、ああ、どうして俺はこんなに弱い人間なのか。

そこへボリースの母の公爵夫人がやつて来て、ボリースがつひに懲罰を科せられる事になつたと告げ、息子を破滅させて置きながら舞踏會などを開いてゐるとは、何たるパリサイ主義か、蟲唾が走ると罵倒して去る。サルインツォーフは眩く。俺はボリースを破滅させて仕舞つた、リユーバは下らぬ男の嫁になる。ああ、神よ、お助け下さい。

この作品を執筆してから十數年後に、八十二歳のトルストイは家族も財産も捨てて家出をし、片田舎の驛舎で野垂死同然の最期を遂げる。『クロイツェル・ソナタ』の後書にト

ルストイは書いてゐる、理想は實現不可能なるが故にこそ理想なのであつて、己れの弱い心が望む程度に迄理想を引下げようとするのは大きな間違ひである。しかし、さう書いたトルストイ自身が、己れの「弱い心」と如何に激しく格闘してゐたか。公爵夫人の罵倒の言葉は、トルストイを死ぬ迄苦しめたのである。

嚴しい愛他主義の傳統を持たない吾々が、さういふトルストイの苦しみを痛切に感じる事はないのだから、感じる必要もない。だが、トルストイの様に、パンを超える何ものかの爲に七轉八倒する手合が、クリスト教文化圏にはこれまで數多く存在し、今なほ確實に存在する事だけは知つてゐなければならぬ。が、さういふ事をさつぱり理解してゐないのが、渡部昇一氏や唐津一氏の様に、パンの次元でしか物が考へられぬ夜郎自大の「民族派」であり、本紙十四號及び十六號の匿名批評欄に、その手の愚者共を持上げる駄文を寄せた「うばざくら」氏である。「時代は二本足の學者を要求する、東西兩様の文化を、一本づつの足で踏まへて立つてゐる學者を要求する」と、明治の昔、森鷗外は書いた。「二本足の學者」の必要は今なほ少しも減じてはゐないのである。

(中村白葉譯、トルストイ全集十二、河出書房新社)

コルネイユ 『ル・シッド』

カステイリア王國の老いたる將軍ドン・ディエーグは、息子ロドリグと伯爵家令嬢シメーヌとの結婚を心待ちにしてゐた。若い二人は相思相愛の仲だつたし、伯爵は豪勇無雙の武人として高名な人物だつたから、正に願つてもない縁談であつた。そんな或日、將軍は國王から名譽ある地位を賜るが、自分が賜る筈だと信じてゐた伯爵は國王の處置に腹を立て、將軍に面と向つて嫌がらせを言ふ。二人は激しく言ひ争ひ、その擧句、伯爵は將軍の頬を殴りつける。將軍は劍を抜くが、忽ち叩き落されて仕舞ふ。

將軍は屈辱感に苛まれ、ロドリグに言ふ。頼む、伯爵と決闘して、家門の恥を雪いでくれ。ロドリグは苦悶する。事もあらうに、「辱められたのが父上、辱めたのがシメーヌの父とは。胸が二つに張り裂けさうだ。(中略)父と戀人、名譽と戀、氣高く嚴しい世の定めと、拒みきれない戀の力」。ああ、なんと慘い運命か。だが、結局ロドリグは、「父親の恩に報いる事こそ大切」とて、伯爵への復讐を決意する。

一方、シメーヌも「胸が二つに張裂けさう」な苦しみを味はつてゐた。そして、名譽を重んじるロドリグならば、必ずや父の爲に劍を取るに違ひないと信じて、やはり運命の

惨さを嘆いてゐる。やがて、ロドリীগは伯爵に決闘を挑み、將軍の仇を討つ。すると、シメーヌは直ちに國王に訴へ出て、涙ながらに叫ぶ。陛下の片腕とも言ふべき忠臣を殺したロドリীগを、どうか厳しく罰して下さいまし。

伯爵にも非はある事を知つてゐた國王は、その場では裁きを下さず、シメーヌを引下がらせる。やがてロドリীগはシメーヌの許を訪れ、「なすべき事を果した今、今度は償ひをする番だ」、どうか君の手で俺の命を奪つてくれと言ふ。すると、「自分は首切役人ではない」とて、シメーヌはそれを斷り、かう語る。見事に義務を果した貴方の振舞によつて、私は義務について大切な事を教へられた。貴方が決闘でお父上の名譽を守つた様に、私も國王に訴へる事で父の名譽を守ります。

かうして二人はそれぞれ子としての義務に飽迄も忠實たらんとするのだが、折から、宿敵モール人の大軍が來襲する。ロドリীগはカステイリア軍の先頭に立つて奮戦し、モール軍を撃退、大いに武名を上げ、國民の鑽仰の的となる。シメーヌは内心ロドリীগへの思慕の情を募らせるが、訴へを取下げようとはしない。だが、乳母や國王に強く説得され、終にロドリীগへの眞情を吐露し、二人は結ばれる事となる。

ロドリীগとシメーヌに限らず、この作品の登場人物は皆、名譽の爲に情念を抑へる事

を何よりも立派な事と考へてゐる。無論、これは中世スペインの敘事詩に材を採つた作品であつて、中世人にとつての通念は現代人にとつてのそれではない。けれども、いつの世にも、「氣高く嚴しい世の定め」といふ桎梏なくして、社會も國家も立行かぬし、その種の桎梏に縛られる事を義務と信じる意識なくして、ロドリグやシメヌを苦しめた様な感動的な葛藤も成立たぬ。

先般のアメリカ大統領選舉に於て、クリントン候補の徴兵逃れに關する疑惑が話題となつた。或米週刊誌によれば、ヴェトナムで戦死した友人の手紙がクリントン氏の實家から最近出て來て、それを側近が讀上げた處、クリントン氏は途中で泣崩れたといふ。さういふクリントン氏について、「自分がヴェトナムで死ななかつた事に罪の意識を抱いた儘、彼は墓場迄行く事になるだらう」と側近は語つたさうだが、この種の記事が吾國のマスコミで報じられる事は決してない。當然である。アメリカは固より、世界の全うな國では、國防は國民の「氣高く嚴しい」義務である。然るに、吾國の憲法には、納税の義務以外に義務條項は含まれてゐない。全うならざるこの國では、國民が「義務について大切な事を教へられ」る機會はない。詰り、義務を繞る深刻な葛藤なんぞ土臺生じる道理がないのである。

(岩瀬孝譯、『コルネイユ名作集』、白水社)

メリメ 『マテオ・ファルコネ』

昔、コルシカ島の奥地に「マキ」と呼ばれる森林地帯があつて、犯罪者達がそこに潜んで、銃と弾薬さへあれば安心して暮して行ける場所であつた。

そこから二キロ程離れた處にマテオ・ファルコネは住んでゐた。目附の鋭い五十歳くらいの男で、牧畜を生業としてゐたが、豪膽な氣質と射撃の腕前ゆゑに、身方につければ頼もしいが敵に回せば大層恐ろしいといふ評判であつた。フォルチュナトといふ十歳の息子があつて、跡取りとして大いに期待をかけてゐた。

或日の早朝、マテオは妻と家畜の見回りに出かけた。家に残つたフォルチュナトが日向ぼつこをしてゐると、遠くで數發の銃聲が轟き、やがて一人の男が現れた。ぼろを纏ひ、銃を杖にして足を引きずつてゐる。「マキ」に潜むお尋ね者で、火薬の買ひ出しに出掛けた途中、治安部隊に發見され、太股に一發食らひ逃げのびて來たのである。

男はフォルチュナトに近づいて言つた。「お前はマテオの息子だな。俺はジャネットだ。追はれてゐる。かくまつてくれ」「何をくれる」とフォルチュナトが言ふと、ジャネットは五フラン銀貨を差出した。フォルチュナトはにやりと笑ひ、よしきた、「安心しな」と

言つて、傍にある枯草の小山の中にジャネットを隠した。

程なく、治安部隊がジャネットの血の跡を追つてやつて來た。が、隊長に何を訊かれても、フォルチュナトは口を割らうとせず、どんなに脅しつけられても、少しも動じる氣配を見せない。當惑した隊長は「賄賂の力」を試みる事にして、高価な銀時計を取出し、「こんな時計を頸に掛けたくないか」と言ふと、フォルチュナトは急に目を輝かせ、「心中の鬭争を明らかに面に現し」、やがて終に誘惑に屈し、枯草の小山を指差した。兵士達が銃劍で小山を突き刺すと、血塗れのジャネットが姿を現し、忽ち取り押へられた。お前はそれでもマテオの息子かとジャネットが叫ぶと、フォルチュナトは五フラン銀貨を投げ返した。

そこへマテオと妻が戻つて來る。フォルチュナトのお蔭でジャネットが捕へられたと隊長が報告すると、マテオは驚き、ついで低い聲で、「情けない事をしやがつた」と呟く。連行されるジャネットは、家の戸口に唾を吐きかけ、「裏切り者」と叫んだ。マテオは黙つて侮辱に耐えた。

が、やがてフォルチュナトを問ひ詰め、一部始終を聞き出すと、マテオは激怒して叫ぶ。これが俺の息子か、「俺の血筋で裏切りをやつた奴は、こいつが初めてだ」。そして直ちに、

近くの窪地に啜り泣く息子を連れて行き、跪かせ、祈りを唱へさせ、泣き叫ぶのも構はず鐵砲で撃ち殺す。銃聲に驚いた妻が駆け出して来て、「何をしたんです」と叫ぶと、マテオは言った。「裁きをつけたのだ」、今からあいつを埋めてやる。

僅か十歳の子供ではないか、マテオの「裁き」は餘りに厳し過ぎると、殆どの讀者が思ふであらう。事實、これは屢々特異な「コルシカ氣質」を描いた作品と評されてゐる。けれども、マテオの行爲が如何に「特異」であるとしても、それは飽く迄も激しい倫理的な怒りに基づいた行爲なのである。マテオにしてみれば、「裏切り」といふ人でなしの行爲によつて、息子は誇り高い「血筋」を汚したのであつて、「裏切り」への怒りは血肉の情愛よりも強かつたのである。

人が人として生きるためにはどうしても守らねばならぬ倫理的價值があると、マテオは信じてゐた譯だが、それは決して「特異」ではない。例へば、T・E・ヒュームはバートランド・ラッセルの平和主義について、「生命を過大評價してゐる」と批判し、「人間の生を意義あらしめるのは絶對的な倫理的價值である」と主張した。吾國に於ても、吉田松蔭は『士規七則』に、「凡そ生れて人ならば宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あり、しかして君臣父子を最も大なりとす。故に人の人たる所以は忠孝を本とな

す」と書いた。乃木大將はそれを額に掲げ拳拳服膺してゐたといふ。

だが、「人の禽獸と異なる所以」について、今や世人は眞面目に考へようとせず、かくて「生命の過大評價」の傾向が世に蔓延つてゐる。それかあらぬか、死刑執行はこの處全く行はれてゐないが、それは歴代法務大臣が署名を嫌がるからだといふ。さういふ國の國民が、軍隊や軍事に無關心なのは怪しむに足りない。生命と引き換へにしても守らねばならぬもののためにこそ、軍隊は存在するからである。だが、生命を超える「倫理的價值」なんぞを氣に懸けるのは人間だけである。マテオのやうに「裏切り」をやつた息子を撃ち殺すとか、乃木大將のやうに忠臣として殉死するとか、そんな事を「禽獸」はやりはしない。そして、「禽獸」にやれぬ事を誰もやらなくなつた國とは、人でなしの國でしかないのである。

（杉捷夫譯、『エトルリヤの壺』、岩波文庫）

ラシーヌ『フェードル』

アテナイ王テゼが遠征に出て半年餘りが過ぎた頃、留守を預る王妃フェードルの様子が尋常でない。何やら「深い苦しみ」でもあるらしく、夜も眠らず食物も攝らず、窶れ切つて寢床に伏せつてばかりゐる。腹心の乳母エノーヌにも「一思ひに死にたい」と呟くが、涙を流して心配するエノーヌを見て、終に胸の内を打明け、先妃の息子イポリートへの「物狂ほしい戀」を告白し、かう語る。「自分の犯してゐる罪は、心の底から恐ろしい」。「自分の戀が憎くてならない」。けれども、「黒々と燃上がる戀のほむら」を、どうする事も出来ないのだ。

そこへ侍女がやつて来て、遠征先での王の死を告げる。するとエノーヌがフェードルに言ふ。王との「現し世の縁の絲が切れた」以上、イポリートへの戀はもはや「世にありふれた戀」でしかなくなつた、それ故、今後は彼と共に生きて國を治めたらよい。フェードルはエノーヌの説得を受入れ、イポリートに思ひを打明ける事にする。

が、イポリートには密かに想ふ娘がゐた。舊王家の姫アリシイで、かつての敵對者の血筋だからとて、交際を禁じられてゐたのだが、王が死んだからには構ふまいとて、イポリ

トは胸の内を告白し、二人は愛を誓ひ合ふ。

それと知らぬフェードルは、「物狂ほしい戀」の思ひを熱烈に訴へる。イポリートは仰天し蒼白となり、「こんな恐ろしい祕密はどうしても忘れて仕舞はう」とて、國を離れる決心をする。フェードルは己が行爲を強く恥ぢ、消え入るばかりの思ひである。そこに、死んだ筈の王が無事歸國したといふ知らせが届く。愕然としたフェードルが死を決意すると、エノヌが言ふ。王妃の「面目を保つためなら」、「人の道を外れる」事になつても仕方がない、イポリートの方から言寄つたのだと、自分が王に言附けよう。フェードルは錯亂の裡にエノヌに全てを任せる事にする。

エノヌの讒言に王は激怒し、イポリートを呼附け難詰する。イポリートは自分が愛してゐるのはアリシイだと語つて無實を主張するが、王は聞入れようとせず、海神の呪ひを掛け國外に追放する。

イポリートのアリシイへの愛を王から聞かされたフェードルは、嫉妬に悶え狂ひ、アリシイを生かしておけぬとさへ思ふが、同時に、さういふ己れの狂熱の淺ましさに絶望する。そして、「およそ人間に弱さは附き物」であり、「戀の力に負けた人は、あなた様お一人きり」ではない、と慰めるエノヌに、激怒して叫ぶ。お前はどこまで私を墮落させる積り

か。顔も見たくない。退れ。エノーヌは走り去り、海に身を投じる。

やがて、追放されたイポリートが海神の手に掛かり非業の死を遂げる。フェードルは王に一切を告白し、毒を仰いで死ぬ。

この作品で描いたのは「神の恩寵なき人間の悲惨」であるとラシーヌは言つたといふ。ラシーヌにとつて、人間を超える存在の助けなくして、人間は己れの「弱さ」を克服出来ぬ頗る「悲惨」な存在でしかなかつた。フェードルが正にさうであつて、「序文」にラシーヌが書いてある様に、彼女は「情慾を憎む事にかけては、決して人後に落ちない女」であるにも拘らず、情慾からどうしても逃れられず、良心と情慾との悲痛な葛藤に苦しんだ擧句、いつそ戀仇アリシイを殺害しようかと思ひ、そこで己が罪深さを徹底的に思ひ知る。さういふフェードルにとつて、「およそ人間に弱さは附き物」などといふ言種は、正に「墮落」への誘惑でしかなかつた。良心の重荷を振り捨て氣樂になれと言つてゐるに等しいからだ。それ故、エノーヌを退け自ら毒を仰いだフェードルは、自己を厳しく罰する事によつて、人間としての良心の存在を證した事になる。だが、それは同時に、生きてゐる限り、情慾を終に征し得ぬといふフェードルの絶望の證でもある。

しかも、ラシーヌによれば、フェードルが「道ならぬ情慾の虜」となつたのは、「運命

と神々の怒りによつて」であつた。それは詰り、彼女といふ一個人を超える大いなる力が彼女を支配してゐたといふ事だが、それは本質的にいつの世にも變らぬ人間の在り様なのである。さういふ力について、昔の人間は「神々」を言ひ、現代人は遺傳や環境を言ふのだが、いづれにせよ、昔も今も人間は宿命の軛の下にある。けれども、フェードルの最期が示す様に、ラシーヌの人間觀は頗る嚴しいものであつて、人間が宿命の名の下に己れを甘やかす事を許さない。たとひ「運命と神々の怒り」にフェードルが押流されたのでしかなかつたとしても、それへの全責任を彼女は自らの良心の問題として引受けねばならない。餘りに嚴し過ぎると、或は讀者は思ふかもしれない。だが、例へば精神異常とか環境の影響とかを引合に出して、兇惡犯をも辨護するのが現代の風潮だが、それは人間を宿命の奴隸と看做し、その良心の存在を否定し去る事であり、實はそれは、恐るべき人間蔑視に他ならないのである。

(内藤燿譯、岩波文庫)

マキヤヴェリ 『マンドラゴラ』

フィレンツェ生れの蕩兒グワダーニは長年パリで遊び暮してゐたが、或日故郷にルクレチアといふ絶世の美女があると聞き、好心を動かされ、歸郷してその姿を見、噂に違はぬ美貌に惚込み我物にしようと決心する。

だがルクレチアには結婚して六年になる夫がゐた。カルフッキといふ金持の老耄學者で、この男、書物に淫して世事に疎い「フィレンツェきつての阿呆」だが、幾ら阿呆でもルクレチアの亭主であり何とかしてこれを誑かさねばならぬ。そこでグワダーニは居候のリグリオの手を借りる事とし、ルクレチアの寢室に潜込める様にしてくれさへすれば禮は彈むと約束する。リグリオはカルフッキに接近し、夫婦が子供を慾しがつてゐる事に目をつけ、一計を案じる。

やがてパリ在住の著名な醫者との触込みで、グワダーニがカルフッキの家を訪れ、かう語る。實は自分は立所に女を妊娠させる祕薬を持つてゐるのだが、祕薬には一つ難點があつて、服用した細君とすぐに接すると薬に含まれてゐる毒素の爲に亭主は必ず死ぬ。それを回避する手は只一つ、誰か別の男を一晚細君と同衾させ毒素を吸収させて仕舞へばいい。

だが、そんな事をしたら殺人を犯す事になるし妻の不倫に手を貸す事にもなるとて、當初カルフッキは拒絶するが、フランス王ですら同じ事をやつたのだと言はれると、忽ちその氣になり妻の説得に取掛かる。が、ルクレチアは中々同意しない。そこでリグリオは懺悔聽聞僧のチモテオを買収し説得に當らせる。チモテオは言ふ、夫を喜ばせる事こそが妻にとつての最高の善である。

説得せられたルクレチアはその晩菓を飲む。グワダーニは乞食に變装して街をうろつき、妻の同衾の相手を探してゐたカルフッキに態と捕まり、寢室に押込まれ、そこで正體を明し、甘言を弄して女の心を捉へ終に思ひを遂げるのである。

これはいかにも『君主論』に於て人間の邪惡を赤裸々に描いたマキャヴェリらしい作品である。『君主論』に紹介されてゐる君主達は霸權を握る爲には背信も殺人も辭せず、頗る殘忍に振舞ふが、グワダーニも肉慾を満たす爲には手段を選ばないし、リグリオやチモテオにしても己が利益の爲に平然と他人を騙す。「自分の利益」になると確信すれば人間はどんな事にでも一所懸命になる、とグワダーニは言つてゐるが、利慾故の淺ましさは今も昔も變らぬ人間の本性なのである。

現に、先般の總選舉で慘敗した社會黨は非自民聯立政權といふ「バスに乗り遅れまい」

とて形振構はぬ醜態を曝出し、七月三十一日附の産経新聞によれば、日野社會黨政審會長は何と「日米安保條約の重要性を高く評價」し、PKO活動の「強化すら示唆」したといふ。眼前の「自分の利益」の爲には黨の綱領もへたくれもないといふ事らしい。けれども『君主論』にマキャヴェリが書いてゐる様に、いつの世にも「人間は非常に單純であつて、ただ目前の必要に支配されるもの」（黒田正利譯）なのだから、今回社會黨が人間性の頗る「單純」な一面を露呈した事を私は咎立しようとは思はない。俗に「代議士は選舉に落ちたら只の人」と言ふが、社會黨の政治家丈が「只の人」に丈はなりたくないとして形振を構はず醜態を曝す譯ではないし、政治家丈が淺ましいのでもない。人間が淺ましい存在なのである。

その點、この作品に於けるカルフツキの描き方は興味深い。子供慾しさにグワダーニの提案を受入れるのだから、彼も亦「目前の必要に支配され」る愚かしい人間でしかない。けれども惡黨共に騙される彼をマキャヴェリは徹底的に笑ひのめしてゐて、カルフツキは最後迄騙された事に氣附かず、これで子供が授るとして大喜びをする拔作として描かれる。リグリオはカルフツキについて、「本に書いてある事」丈はよく知つてゐるものの、「世の中の事はからつきし御存知ない」と評してゐる。詰りカルフツキは死學問をやつて、人間

に關してはまるで無知であり、それ故易々と騙される譯だが、その種の愚昧をマキャヴェリは何よりも輕蔑した。『君主論』に彼は書いてゐる。無能故に國を失ふ事になつた君主達は己が「不運をかこつ事をやめて、寧ろ自らの無能をこそ責むべきである」。何故なら「平穩無事の時代」に安住して、全て世の中の事は不確定であるとの眞理を悟らず、「來るべき運命の變轉」に備へる事を忘つたのは彼等自身だからである。

全て世の中の事が不確定であるのは、畢竟、人間が道德的に當にならぬ存在だからである。八月二十三日附の産經新聞によれば、かつての「PKO報道熱」は今や「嘘の様に冷卻化」し、マスコミはモザンビークPKOについて「無關心同然」の有様だといふ。カンボジアの總選舉が終る迄は毎日の様に自衛隊の事が報じられ、中には憤激に堪へぬ程好加減な報道もあつたけれども、當時、「國際貢獻」こそ自衛隊に與へられた任務だとして燥いでゐた自衛官は、全て世の中の事は不確定であるとの眞理について認識が缺けてゐたと言はざるを得ないのである。

(大岩誠譯、岩波文庫)